

音楽学部教職課程履修学生に対するピアノ教育の取り組み
－演奏学科における実践報告－

A Report on Piano Pedagogy in Teacher Training for Students of the School of Music

多田 秀子，中村 伸吾，今岡 淑子，奈良田 朋子
宮下 朋樹，家永 摩利子，右近 恭子，鷹見 恵理子

TADA Hideko, NAKAMURA Shingo, IMAOKA Yoshiko, NARATA Tomoko
MIYASHITA Tomoki, IENAGA Mariko, UKON Yasuko, TAKAMI Eriko

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

【実践報告】

音楽学部教職課程履修学生に対するピアノ教育の取り組み
—演奏学科における実践報告—

A Report on Piano Pedagogy in Teacher Training for Students of the School of Music

多田秀子* 中村伸吾** 今岡淑子** 奈良田朋子*
宮下朋樹* 家永摩利子*** 右近恭子*** 鷹見恵理子***

TADA, Hideko* NAKAMURA, Shingo** IMAOKA, Yoshiko** NARATA, Tomoko*
MIYASHITA, Tomoki* IENAGA, Mariko*** UKON, Yasuko*** TAKAMI, Eriko***

キーワード：ピアノ教育 教職課程

はじめに

音楽学部では、学校教育における中学校音楽の目標「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」、高等学校芸術の目標「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」に則り、教員としてそれらの目標を実現するために必要なカリキュラムを組んでいる。カリキュラムは、①ソルフェージュ、②声楽、③器楽、④指揮法、⑤理論の分野に分かれ、そのそれぞれに教科に関する科目が設定されている。

本学部では音楽の授業を行うために最も中心になるピアノ伴奏を難なくこなしていけるように、「③器楽」に属するピアノ実技に関する指導について特に力を注いでいる。本学科学生にとって、教職は大変魅力的な憧れの職業であり、その夢の実現のために本学に進学した学生が多く、音楽学部在籍学生全体の3分の1を占めており、ピアノ担当教員はさまざまな工夫を凝らしピアノ教育にあたっている。その教育の一端を報告する。

1. 概要

演奏学科の教職ピアノ教育の特徴は、専修に関わらず副専ピアノ実技を履修させることである。ピアノ専修の学生であれば、本来副専ピアノ実技は必要ないと思われるが、副専ピアノ実技（教職）という科目は、ピアノ専修の学生で教職課程履修者のみを対象に、教育の現場で求められる音楽的に臨機応変な対応力を身につけさせ、臆せず初見演奏に取り組める能力を高めるために開設されている。2年間履修させ、教師として必要なピアノ能力を更に高めるための取り組みを行っている。

また、教職課程履修者の履修カルテには、実技試験の結果、良かったところ、改善すべき点、今後の課題等を採点者全員が記録し、集約したものを入力している。学生は教師を目指して勉強をする上で自分の利点、弱点などを知ることができ、今後の参考になるものとして利用する。この特筆すべき教育について詳しく述べる。

* 演奏学科准教授 ** 演奏学科教授 *** 演奏学科非常勤講師

2. ピアノ教育の現状と実践

演奏学科ではピアノ実技は個人レッスン形式で行われ、主専実技は週1回45分、副専実技は週1回22.5分、個人のレベルに合わせた指導を各学生の担当教員が実施している。現状では個々のレベルの差がかなり有り、主専では演奏家を目指している学生がいる一方で、基本的なテクニックが充分でない学生もいる。また、副専では主専並みに弾きこなす学生から、高校生からピアノを始めた初歩的な学生までさまざまな到達度の学生がみられる。そのそれぞれのレベルに合わせて、各学年に設定した課題を克服しなければならず、指導時に頭を悩ませることが多いのが現状である。試験では各学年で経験すべき課題（下表参照）を専任教員が決定し、個人レッスンの担当教員が学生のレベルに合わせて選曲し、弾きこなせるように指導していく。

中等科音楽教育の目標である「生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てる」ためには教師自身が喜びを持って音楽を楽しんでいることが不可欠である。生き生きとした音楽表現ができてこそ、より良い指導が可能となる。その指導の中心にあるのがピアノである。

そのような指導者育成のために、本学科のピアノ教育にあたっては、どの専修においても基礎的な技術の習得、リズム感、拍節感の習得、しっかりとした読譜力、表現力を身に付けさせることを目標に指導を行っている。

ピアノ上達のためには、練習に向かうモチベーションを高く持ち続けるように指導していかなければならない。ピアノを上手く使いこなして授業展開を行う能力を高めるために練習する必要性を自らが感じ、自発的に練習しなければならない。そのためには自分の弾く音楽に自信を持たせることが重要であると考え。特にピアノを弾いてきた期間が短く習熟度が低い学生は、劣等感を先行させないように配慮することが大切で、練習を重ねれば必ず楽しんで弾けるようになると信じ、アクティブに前向きな姿勢で練習に励むように指導していくことを心がけている。自信を持てば自分の力で音楽作りを進めていけるように成長する。

基礎的な技術の習得のためには、レッスン中に何度も繰り返し正しい方向性を示し、身につけさせる。そこを理解できれば自らの反復練習で1週間後にかなりの変化が見られる。

教育現場に赴くためには、次々に新しく生まれてくる曲に自力で対応できる力を持つこと、できるだけ短時間でその音楽が持つ魅力を掴んで表現する力が必要であることから、初見視奏にも力を注いでいる。

例1 演奏学科主専実技（ピアノ）試験課題

科目名	A（前期）	B（後期）、卒業演奏
主専実技Ⅰ	エチュード 2曲 Bach：シンフォニアより 任意の曲 1曲	ソナタ全楽章 1曲
主専実技Ⅱ	組曲 1曲	Scarlatti ソナタ 1曲 自由曲 1～数曲 <7分程度>
主専実技Ⅲ	変奏曲 1曲	Chopin エチュード 1曲 自由曲 1～数曲 <7分程度>
主専実技Ⅳ 卒業演奏	20世紀以降の作品から任意のもの 1～数曲 Ravel, Debussy, Rachmaninoff, Scriabinの作品は除く <7分程度>	自由曲 1～数曲 <10分～15分程度>

例2 演奏学科副専ピアノ実技試験課題

科目名	A (前期)	B (後期)
副専ピアノ 実技Ⅰ	Bach: アンナ・マグダレーナの音楽帖 Bach: フランス組曲 (Allemande, Gigue, Gavotte, Fuga, etc.) より任意の曲 1 曲 カットなし Czerny 30 番練習曲の第 1 番～10 番より任意に選択した 1 曲を演奏すること	Haydn: 任意の曲 1 曲 カットなし (ソナタなら 1 つの楽章) Czerny 30 番練習曲の第 11 番～20 番より任意に選択した 1 曲を演奏すること
副専ピアノ 実技Ⅱ	Bach: イヴァンジョン 2 声及び 3 声 Bach: 平均律の Fuga より任意の曲 1 曲 カットなし Czerny 30 番練習曲の第 21 番～30 番より任意に選択した 1 曲を演奏すること	古典派時代の作品より Haydn を除く任意の曲 1 曲 カットなし
副専ピアノ 実技Ⅲ	Bartok: ミクロコスモス Mendelssohn: 無言歌曲集 Schumann: ユーゲントアルバム より任意の曲 1 曲	古典派及びロマン派時代の作品より任意の曲 < 3～5 分 >
副専ピアノ 実技Ⅳ	自由曲 < 3～5 分 >	自由曲 < 3～5 分 >

例3 演奏学科副専ピアノ実技 (教職) 試験課題

科目名	A (前期)	B (後期)
副専ピアノ実技Ⅱ	カデンツ全調 初見視奏	初見弾き歌い (メロディガイド型伴奏付き)
副専ピアノ実技Ⅲ	初見弾き歌い	初見弾き歌い

3. 各実技担当教員のピアノ実技指導実践例

次に演奏学科における各実技担当教員のピアノ実技指導について、それぞれの考え方、教授法等日頃の実践例の報告を以下に示す。

(1) 指導実践事例①

1) 主専実技 (ピアノ)

主専実技のレッスンでは、ある程度自分で譜読みができた状態から出発し、次にその曲について時代背景や構成や様式など考察してタッチの工夫など色づけしていくというスタイルでレッスンを進めている。より良い演奏のために心がけている以下のようなポイント⁽¹⁾を押さえながら学生個々の問題点を検証し、解決している。

- ① 曲にふさわしいテンポで全体に一貫性があること。
- ② 活きたリズムに対する感覚が必要でリズムの持ついろいろな性格を表現できていること。

- ③ どこからどこまでが一つのフレーズなのか自然に理解していること。また、小さいフレーズはできて大きいフレーズを見落とさないこと。
- ④ ペダルは演奏者の感性に左右されるが、場面と空間の響きにふさわしく踏むこと。
- ⑤ 作品の特徴、様式などを知った上で、その作品の大まかな形式を理解し、どう表現するかという全体的な構想が感じられる演奏になっていること。
- ⑥ 正しく弾かれていても想像力や語りかけがなく、起伏に乏しく、気力に欠けているような演奏では心惹かれないので、ファンタジーに溢れ音楽を表現する喜びがあること。

2) 副専ピアノ実技

レッスンのスタイル自体は主専実技と同じ方法で実施しているが、主専ピアノの半分の時間であるため、教材には短く様々な弾き方や歌い方ができる曲を選曲している。

いろいろな到達度の学生がいるが、一番問題になっている点を見つけ出し、教員と学生が共に弾き方を実践して、学生が自ら練習に取り組めるようにサポートしている。例えば、譜読みの苦手な学生には平易な曲をどんどん見る訓練、指の力が弱い場合は全てをフォルテで弾かせる、レガート奏法ができない場合は一緒に何度も歌って弾かせるなど、レッスンの中で、「できた」「わかった」「気持ちいい」など実感できるように進めている。

3) 副専ピアノ実技（教職）

副専ピアノの初見レッスンでは、教育現場で取り扱われるような曲を弾き歌いさせる。レッスンでは次のような進め方を実施している。

- ① まず1分間の予見をする。予見時には調性、テンポ、表情記号、臨時記号、歌詞をみて、曲を見通していく。
- ② 弾き歌いを実践する。予見の良し悪しで実際に演奏した際の出来に差が生じるので、予見について検証する。
- ③ その後テンポや拍子感、リズム感、旋律の表現方法、歌詞内容について考察する。
- ④ 再び弾き歌いをする。考察後の2回目では随分曲を理解し表現できるようになる。
- ⑤ 1週間後には自分のレパートリーとしてすらすらと表現して、楽しむ。

このようなレッスンの積み重ねにより、楽譜の読み込みが次第に正確かつ深くなり、貪欲に新しい曲に挑戦しようという意識が芽生える。これをきっかけに自ら伴奏つきの楽譜を準備し、経験を重ねていくことになる。

4) 教育伴奏法

この科目は教職課程履修者にとって必修の科目であり、中学、高等学校の授業で取り上げられるような教材を用い、各曲の指導のねらいとポイントに沿った音楽づくりができる伴奏および弾き語りをすることを目的としている。

教育現場でのピアノは伴奏の部分で弾けるだけでは務まらない。指導しながら伴奏する技能を習得するために、初見力を高め、余裕を持って音楽表現ができるようになることと、中等科音楽の教材の伴奏を弾きながら歌うことを目標として、授業を行っている。特に、ピアノ専修以外の学生はピアノを弾くことだけで精一杯になり、指導できるほど歌を聴くことができていなかったり、テンポに乗れなくなってしまったりしがちなので、余裕を持てるように練習に導いていくことが重要なポイントに

なる。

初見視奏にはコンコーネ 50 番を使用している。歌う学生と弾く学生を分けてお互いを聴くことを意識して行い、演奏後に学生からどんな演奏になっていたかを聞き出し、その原因を解明して次に繋げていくように心がけている。そのため、弾いている学生は歌をよく聴くようになるし、反対に歌っている学生も伴奏を意識して歌い、どのようにすれば歌いやすくなるかを工夫し始める。こうしたことから自らより良いものを目指しアイデアを蓄積していく。

教材を使って伴奏をする際には、作曲者、作詞者、歌詞の内容について考察し、出だしの合図や、歌に対する指導の声かけなども行いながら弾き歌いをし、考察を加えていくという方法を実践している。伴奏することによって人前で弾くことにも慣れ、次第に余裕を持って自分自身の表現ができるようになる。

(多田 秀子)

(2) 指導実践事例②

1) 主専実技(ピアノ)

音楽学部演奏学科に入学した学生はピアノ、声楽、管楽器、弦楽器のいずれかを主専攻実技として4年間履修することとなる。筆者の担当はピアノであり週に一度個人レッスンをを行っている。レッスンにおいては昨今、大学教育において盛んに言われている双方向授業、アクティブラーニング等が必然的に行われている。すなわちレッスンを受ける楽曲を自分であらかじめ授業時間外に学習して来なくてはならず、事前学習してこない学生に対してはそもそも授業が成り立たない。一般的な講義科目に比べて「教員が受動的立場にある」といって良いかもしれない。学生が主体的に学習してきたことに対しアドバイス、助言、修正を行い学生の能力を引き出す。最終的には芸術作品に相応しい内容に仕上げるべく双方向で議論をし、しばしば私が演奏をしてみせる。

音楽芸術においては最重要といっても良い「感受性の喚起」には実際に私が弾いてみせて、じかに音・響きを間近に聴くことが一番良いようである。音楽の「音・響き」「リズム」は街中に溢れる生活音とは違い、鳥のさえずる声、波の音、風の音、木々の葉擦れの音、等々いわゆる自然界の音が人間の感情、精神と会いまみえ芸術に昇華されたものということを学生には感じ取って欲しいと思っている。

2) 副専ピアノ実技

副専ピアノ実技はピアノ以外を主専攻にしている学生(声楽・管楽器・弦楽器)に対しレッスンを行うものである。レッスン形態は基本的に「主専ピアノ」と同様だが、レッスン時間は半分となる。必然的に学生に対する要求度も異なり技術的課題も平易なものとなる。ピアノ専攻以外の学生に必ずピアノを学ばせる慣習は昔からあり少々不思議な気もするが、音楽を総合的(和声理論・作品構造・ポリフォニー等)に学ぶためには理想的な楽器であると私は考えている。必然的に将来音楽教師として教壇に立ち、授業をする学生にとってピアノの習熟は必須であろう。

3) 副専ピアノ実技(教職)

(教職)と付いているが、これはピアノを主専攻としている学生を初見視奏および初見視唱に対し習熟させるための科目として開設されている。

学校現場では生徒の合唱、リコーダー等の演奏に対し瞬時に楽譜を見てピアノを初見で演奏をした

り和声付をしたり歌ったりする能力を求められることも多い。平易な楽曲を瞬時に読解し演奏することは慣れの面も大きく毎週の授業では絶えず新しい課題を与え、その場で演奏することを求めている。主専攻としてのピアノ演奏にも言えるが、調性・拍子・表情記号の理解、把握に関してはまず第一にしないではいけないことであり、このことを徹底させている。

4) ピアノアンサンブル

副専ピアノ実技の項でも記述したが、ピアノという楽器は総合的な表現能力を持つ。ソロ(一人)、室内楽(他者との共演)、伴奏と用途は広い。

「ピアノアンサンブル」とはピアノ奏者2人、あるいはそれ以上で共演する室内楽の一種である。同質の響きの中でお互いの出す音を聴き合い、パートナーの気持ちを感じ取る感性を養う。具体的には連弾(1台のピアノを2人ないしは多数で演奏する)、2台ピアノでの演奏法に習熟するための授業をレッスン形式で行う。

伴奏を含めてアンサンブル演奏全般に言えることだが、自分の出す音・響きを聴きながら演奏し同時に他者の音・響きを聴くのはなかなか難しい。メロディラインと伴奏形の把握、和声のバランス、ポリフォニーの表現等々、楽曲の造形は複雑でありそれを協同で読み解きながら音・響きを作り上げ、リズム、テンポを合わせて音楽を再構築していく。音楽的な耳を養うには大変有益であり、また知らず知らずの内に「和」の精神を醸成することとなる。

なお、ピアノアンサンブルは特に教職課程履修者対象に開講されている科目ではないが、教職志望の学生の履修者は多い。

(中村 伸吾)

(3) 指導実践事例③

1) 主専実技(ピアノ)及び副専ピアノ実技

文部科学省中学校学習指導要領(平成20年)を基盤に、主専実技(ピアノ)指導について心がけていることは以下に述べる通りである。その内容は教職の分野にも役立つものとする。

文部科学省中学校学習指導要領(平成20年)には中学校の音楽教育の目標について「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」とあり、大学でピアノを学習することは、中学校の音楽教育に実際にどのように役立つのか考える。

- ① クラシック音楽ならではの美しいメロディー、ハーモニーを楽しむ。
- ② 楽譜は小説に似ている。その楽譜から何を感じ取るかは人それぞれで音符や記号だけを頼りに、どういう内容の曲なのか想像力を膨らませて音で再現していく。
- ③ 楽譜は役者の台本に似ている。役者によって同じセリフも表現の仕方が全く違う。演奏者によって大根役者になるか、巧みな役者になるかはパフォーマー次第。呼吸の大切さなど学習する。
- ④ 音符以外の表情記号はイタリア語やその他の原語で書かれているため(邦人作曲家でさえ)調べる必要がある。単にイタリア語だけでなく語源の似た英語、フランス語と語学学習の広がりも自然と体得することが出来る。また言語と音楽の関わりなどを学習することが出来る。
(ドイツ音楽ははっきりしたドイツ語口調から、フランス音楽は流麗なフランス語から、など)
- ⑤ 音符、楽譜はワールドワイドなツールである。

- ⑥ 作曲家は主に100年以上前のヨーロッパ中心の出身者であることから、バックボーンを知ることが必要である。作曲家の生きた時代、国、当時の文化や文学、芸術、産業、宗教、など調べるとすべてがつながり、非常に楽しい。
- ⑦ ピアノ演奏はソロ演奏のみならず、声楽伴奏、器楽伴奏、合唱伴奏、オペラ伴奏、オーケストラ中のピアノパート演奏など、非常に多岐にわたっていることから、全ての楽器の中で一番音楽をトータルに音楽を識ることが出来る。作曲家はピアノを使って作曲している。
- ⑧ ベートーヴェンのピアノソナタはそのままオーケストレーション出来る、と言われる通りピアノ音楽はピアノ一台で音楽を十分に表現できる楽器である。
- ⑨ ⑧のことからピアノ演奏には非常に高度な技術が必要である。練習する際は工夫することが必要である。練習する内容を考えることが練習であるとも言える。
- ⑩ 学習中の曲のみならず、同じ作曲家の別の楽曲、その周辺の作曲家の作品なども聴き、作曲家のスタイルを知ることが重要。
- ⑪ 試験では暗譜で楽曲を演奏しなければならないので、作品の構成など分析しなければならない。

以上、ピアノの学習を学習指導要領にあてはめてみると「表現及び鑑賞の幅広い活動(②, ③, ⑦, ⑧, ⑩)を通して、音楽を愛好する心情を育てる(①, ②, ③, ⑦, ⑩)とともに音楽に対する感性を豊かにし(①, ②, ④, ⑦, ⑩)音楽活動の基礎的な能力を伸ばし(②, ④, ⑦, ⑧, ⑨, ⑪)音楽文化についての理解を深め(⑤, ⑥)豊かな情操を養う(②, ③, ⑦, ⑧)」となり、大学でのピアノ学習が大いに中学校の音楽教育に生かされるよう教職に関連のある指導に心がけている。

(今岡 淑子)

(4) 指導実践事例④

教職につながる音楽教育のあり方において、どの科目においても共通して言えることは、楽譜を正しく理解して読み解く力をつけることである。演奏学科では当然演奏能力を高めることが第一の目標であるので、まずリズム感および拍節感を自覚して持つこと、楽曲の構成を考える力と習慣をつけることを基礎に、各個人のレベルによって積み上げていく目標は異なる。

1) 主専実技(ピアノ)

あらゆる作品に対応できる高い演奏技術と、音楽性や表現力を身につけるための作品研究を促すようにしている。そのために音楽の歴史を知り、現代のピアノとそれ以前の鍵盤楽器との異なる奏法、例えば強弱のつけ方やタッチの違い、ペダルの扱い方等をイメージさせ、また作品の時代背景や作曲家の国民性などを理解した上で各楽曲にふさわしい演奏を研究させるようにしている。

2) 副専ピアノ実技

適切な強弱とテンポ感、生き生きとしたリズム感で正しく演奏できるように基礎的な技術力を磨くようにし、教職課程履修者対象の副専ピアノ実技では初見視奏能力を高めるための楽譜の見方や読み取り方のコツ、和声を担う左手パートの重要性を常に指導している。

3) アンサンブル系科目

重奏演習や協奏曲などのアンサンブル系の科目においては、合わせるためのテクニックを身につけ

るとともに、ソロの場合とは異なる自分の役割を考えることを気づかせるようにしている。主導権を握って音楽を進めていく部分と、伴奏に回る際の音色とバランスをトータル的に聴くこと、そしてピアノを弾く者にとって楽器の特性上ありがちな、呼吸の足りなさを自覚させ、かなりしっかり目に人と共有する息を取るということを指導している。

(奈良田 朋子)

(5) 指導実践事例⑤

1) 主専実技

主専実技のレッスンにおいては、学生自身が楽曲を自主的に準備学習してくることが前提となる。その上で、個々の学生の技量や知識を補いながら、学生が音楽を生きたものとして表現できるように導くことが教員の役割であると考えている。教員と学生の相互理解により、楽曲に対する考え、練習方法、想像力、ひたむきに勉強する意欲等が身につく、最終的に学生が音楽を主体的に表現・発信出来ることが目的となる。学生の資質は個人によりさまざまであるが、ピアノ教育の取り組みで私が大切にしている事項は以下の通りである。

① 学生ひとりひとりの掌握

学生の資質を見極め、その学生に必要なものは何かを常に考えることが大切である。読譜力が不足していれば、譜面を正しく読むことをレッスンの折に触れ教える工夫をし、演奏表現のための技術が不足していれば必要な練習課題を与えて技術の向上を図る。リズムや調性の感覚、楽曲の構造に理解を即す場合もある。

② 音に対する感覚を育てる

自分が作る音をしっかり聴き、美しい響きを求める習慣を育てる。

③ 歌わせる

ピアノのために書かれた作品は、メロディーの美しさに満ちている。音楽の本質は歌うことであることを理解させるため、時には声を出してメロディーを歌い、ピアノでのカンタービレ奏法を獲得するために労力を費やす。

④ 学生の模範となる

学生の学ぶ意欲は教員自身の姿勢に動かされて伸びていく側面も大きいといえよう。教える側が日々音楽を直視し、音楽を掘り下げ、自分のものとして日常の生活に音楽を根づかせている姿を見て、学ぶ者の姿勢も前向きに働いていくことになる。

2) 副専ピアノ実技及び副専ピアノ実技（教職）

副専ピアノ実技は主専実技の半分の時間内で行うことになるが、レッスンの形態は主専実技と同じである。ピアノ専修以外の学生が対象となるため、基礎的な技術・読譜の能力を身につけることが重点となる場合が多い。平易な曲でも、全体の形式や和声、メロディー、ポリフォニーなどに注意を向けながら、楽曲の理解を即すようにしている。

副専ピアノ実技（教職）では、教職課程受講生に初見能力を身につけさせるために毎回課題を与えている。基礎的な読譜の方法を毎回指導することになるが、クラス授業実施を前提とするため、視唱での声量や明確な発音に注意を向けることが多い。主体的に行動する意欲を養うことが教職において必要とされる大切な側面であろう。

以上、主専実技（ピアノ）と副専ピアノ実技について実践例の報告を示した。マンツーマンの対話を通して行われるピアノ教育を通して、学生は演奏表現や技術、洞察力、感性を磨きながら内面的な強さを獲得していくことになる。教育本来の目標は、人間を大きく育てていくことであり、小学校・中学校の「音楽」の時間も、音楽を学ぶことによって心を豊かにし、情操を豊かにすることが目標になるであろう。ピアノ教育の目的は、演奏能力を個別に伸ばして終わりとするものではない。ピアノ教育により、何事にも耐える力が身につく、細かい心遣いが周囲に配れるようになり、人間的な心の豊かさを得ることが期待される。その成果は教育者として必要な人間的成長の一助となるであろう。

（宮下 朋樹）

（6）指導実践事例⑥

1) 副専ピアノ実技

教職課程受講生に対して授業で取り上げる作品の歴史、背景及び作曲者の意図を説明し、音楽史上での意義を示し、多角的観点で見える視座の育成を心がけている。実技指導においては、各個人の技術の向上を目指す。

教職を目指す学生の中にはピアノ実技習得時間が短く、かつ、教職志望が真摯なため、目指す自己の技術と演奏技術に隔たりが見られることがある。そのため演奏への苦手意識が生まれ、高ければ、ピアノ演奏への嫌悪につながることもある。

これら問題点を克服させるために行っているピアノ実技指導は以下の通りである。

- ① 課題曲とは別に音階演奏を課する。4 oct.の滑らかな運指が不可能と判断された場合には、まず1 oct.を徹底的に習得させる。
- ② 運指がどこおりにく運ばれることにより演奏が時間芸術であるという認識が演奏に現れるようにするための指導を行う。（数回）
- ③ 課題を克服することで演奏への意欲と自信が生じるように個々の能力に応じた課題を与える。
- ④ 学生自らが指導者となったときに与える課題や指導の取り組みの参考となるアドバイスを与える。
- ⑤ 生徒に寄り添い音楽を通して学ぶ楽しさを伝える心が育つよう心がける。

（家永 摩利子）

（7）指導実践事例⑦

1) 主専実技（ピアノ）

教職に就いた場合、単に「ピアノが上手に弾ける」というだけでは役に立たない場合がほとんどである。学校においては、歌の指導や合唱の指導で弾き振りをしたり、伴奏をしながら指導したりということが多々ある。そのためには、ピアノを弾きながら話すことや弾きながら歌うことができるだけでなく、弾きながら周りの音を聴くこともしなければならない。つまりピアノを弾くことだけに集中しないよう指導する必要がある。

ピアノの学生が日ごろ学んでいるソロの難曲ではなく、比較的平易な伴奏を請け負っている時が実践のチャンスである。まずベースラインの動きとハーモニーの移行を大まかにつかませ、生徒にとって難しいテクニック、たとえばオクターヴの連続、和音変化の連続などが出てきた時には、それをいかに簡略化して弾くか瞬時に判断できるように指導する。そのためには、できるだけ広範囲に楽譜を把握し、どのパートが一番必要かを見極めさせなければならない。また簡略化することで必要となる

指番号の変更の素早い判断も必要である。

さらに、日頃のソロの勉強においても必要な作業だが、実際にメロディを声に出して歌わせることもこれまで実践してきた。弾きながら聴くためには、人とアンサンブルする経験が役立つため、できるだけ伴奏を引き受けるように指導している。そして、聴いたものに合わせるのではなく、同時進行で聴く難しさに気付くよう指導した。

また中学、高等学校での吹奏楽部の指導では、いくつもの種類の違う管打楽器の合奏をスコアを読んで指導しなければならないが、殆どの学生はスコアすら見たことがないのが現状である。筆者の場合は、室内楽の演奏活動で管楽器奏者との共演も多いので、移調楽器の混在するスコアを弾いて見せることもある。さらに演奏会に興味のある学生は、楽譜で見た管楽器たちが実際に美しい響きでアンサンブルをするのを聴く経験をしている。

2) 副専ピアノ実技

ピアノの習熟度の低い学生は、弾くことへの不安から楽譜にかじりついて弾いてしまいがちだが、まずは楽譜から目を離す勇気を持たせる必要がある。これには楽譜を大雑把に把握する力が必要となる。自分の勉強している曲の伴奏パートなら少々なじみがあるので、まずはベースラインだけでも弾けるように指導し、ピアノの能力のある学生には歌いながら弾くことにも意欲を向けさせる。

もちろん簡略化するということについては、ピアノ専攻生の指導と同じである。しかし、大譜表を見て弾くということがすでに難しい学生の場合には、主要三和音の基本形だけでもいいので即座に伴奏をできるようにすることが必要となる。とはいえ、すべての楽曲がハ長調で書かれているわけではないので、各調への対応も必要となる。したがって、何よりもピアノの基礎能力をしっかり身につけさせることが、教育現場での臨機応変な対応には不可欠である。そしてピアノを弾く不安を少しでも取り除くために「ピアノを弾いて遊ぶ」「色々な楽譜を弾いて楽しむ」という、日頃からピアノに馴染む暮らし方を示唆している。

(右近 恭子)

(8) 指導実践事例⑧

1) 副専ピアノ実技

教職課程を履修する学生の實力、能力そして性格を把握し、その学生に何が足りないか、どの部分を伸ばしてやれば良いのかをいつも考えて指導している。筆者が学生に伝えたいことは、音楽の素晴らしさであり、決して音楽を嫌いにさせてはいけないということである。個人指導では、容易なことでもこれがクラス授業になるといろいろ難しくなる。授業の焦点を平均値に合わせて指導することになるが、レベルの低い生徒にも手をさしのべ引き上げてやらなくてはならない。

筆者がこれから教職に携わっていく学生に伝えたいことはいつも生徒に思いやり、愛情をもって接するということである。音楽が生徒の人生の節々で少しでも心のよりどころになるような指導をして欲しいと願っている。そのために教職過程を履修する学生には、ピアノ曲の初見が必要であると考え、次のような実践をしている。

- ① 学生が練習した曲の楽譜の中から別の曲を選んで初見で演奏させてみる。
- ② ダンノーゼルの教則本(ソルフェージュに伴奏がついたもの)を使って、まず予見し、伴奏だけ弾かせてみる。もう一度予見して今度は旋律の部分を歌いながら伴奏してみる。
- ③ 楽曲、歌曲 etc.をできるだけ多く知っていること。レッスンの時間内では曲を聴かせること

は難しいので、弾いた方がよい曲を指示する。

(鷹見 恵理子)

(9) まとめ

以上の報告からわかるように、各実技担当教員がより優れた中等科音楽教員の養成のために学生と向き合い、それぞれに必要な学習のポイントを見抜き指導を行っている。学内の授業アンケートでの学生の満足度が特に高いのもこうした教育の成果である。このように教員がピアノ教育を通して学生と真摯に向き合うことで、学生は音楽に真剣に向き合い、より良いものを目指して努力し忍耐力を養い、感性を磨き、自主性を育み、人として大きく成長していく。その結果、毎年教員としての勤務が決まり巣立っていく学生が多く、昨年は常勤、非常勤講師を合わせると 17 名の教員を輩出した。教職を希望した学生全員が教壇に立つ夢を果たしている。それぞれが音楽を生き生きと指導している姿は、我々大学教員の誇りとなり、後進の育成への励みとなっている。

4. 履修カルテについて

前述したように、定期試験中にそれぞれの採点教員が自身の担当学生のみならず、全員のコメントを記述している。それを学校教育センター委員が取りまとめ、支援的コメントとして履修カルテの教科に関する科目コメント欄に入力している。

自分の試験での演奏についてアドバイスがあるとともに今後の目標を示唆した大いに活用できるものであり、試験後にも教壇に立つことを想定して自習できるようになっている。また、何らかの問題のある学生は呼び出して個人指導するなど、手厚いサポートを行っている。

おわりに

音楽学部には教員を目指して入学してくる学生が多く、教壇に立つ学生のために教職課程には力を注いでいる。特にピアノ実技指導に関しては「2. ピアノ教育の現状と実践」で述べたような、入学時の習熟度の差を埋めるべく、基礎的テクニックの修得や初見力向上のために教員も創意工夫を重ね今日の成果となっている。今後も「音楽を愛好する心情を育てるとともに音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」という目標を達成できる教員育成のために、ピアノ実技指導担当教員は互いに活発な意見交換をしながら、ピアノ教育をよりよい方向に発展させていく所存である。

注・引用文献

- (1) 井上直幸『ピアノ奏法—音楽を表現する喜び』春秋社, 1998, p.16